

<全体分析>

試験時間 60 分

解答形式

全問マーク式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

※大問5題。昨年度から各大問ともに小問数は8問で、総マーク数は40となっている。

出題の特徴や昨年との変更点

地誌分野2題, 系統地理分野3題で昨年度と同じであり, 本学の標準的な出題構成となっている。正誤判定や統計判定が中心で, こちらも本学の標準的な出題形式。思考力よりも知識力を問うものが多い

その他トピックス

特になし

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	マーク式	オセアニア地誌	地図利用。オセアニアの気候(ハイサーグラフ), 経度, グレートアーテジアン盆地, ヨーロッパ人の入植, 島嶼部, 資源, 先住民, 国際関係などについて問われた。(8)国際関係についての問いはやや細かな知識が必要。	標準
II	マーク式	東アジア地誌	地図・統計利用。東アジアの気候(雨温図判定), 人口, 各都市の特徴, 台湾, 環境問題, 中国の貿易相手, 電気自動車, 宗教について問われた。(4)台湾に関する問いなど, 受験生にはやや答えにくいものもみられたが, 基本的な問いが多い。	標準
III	マーク式	工業	統計・統計地図利用。在来・伝統産業, エレクトロニクス産業, 国際的な工業生産・企業活動, 自動車, 鉄鋼, 知的財産使用料の貿易額, 都道府県別の産業別製造品出荷額等などに関して問われた。(2)のファブレス企業, (4)のノックダウン輸出などやや細かな知識を要する問いも散見されるが, 基本的な問いが多い。	標準
IV	マーク式	地形図・地理情報	地形図利用。2万5千分の1地形図(旧図と新図)を用いた読図問題が中心。判読できる地形, 地図記号, 実際の距離と標高差, 新旧地形図比較, 地理情報に関する用語, 地図の歴史, 時差などについて問われた。(1)砂州や干潟などの判読, (5)新設・廃止された地図記号, (7)地図の歴史などは正確な知識が求められる。(8)の時差はサマータイムを考慮する必要があるため, 正答率は下がると推測する。	標準
V	マーク式	村落・都市	統計利用。村落の形態, 都市に関する用語, 都市人口割合の変化, 都市の内部構造, 日本の歴史的集落形態, 日本の過疎地域面積割合, 再開発, 都市問題などについて問われた。(3)都市人口割合におけるポーランドの選択, (5)歴史的集落形態における寺内町を選択, (6)過疎地域面積割合, (8)都市問題におけるマニラの地下鉄の有無など, やや細かい知識を問うものがあるが, 難問と思わしき問いはないだろう。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

例年地誌を中心とした出題が多い。教科書では扱わないような細かな国についてもある程度の知識（自然や気候・宗教・民族・経済・政体など）を身につけておく必要がある。ただし、それらの知識は基礎的事項の延長線上にあるに過ぎず、常にそれらの事項や背景を論理的に整理しておくことが入試対策の近道である。統計や地図を用いた出題が多いのが本学の特徴であるため、最新の統計を確認しておき、地名（山脈や河川、海域などや国・都市）と地図上の位置を一致させておくことが求められる。地理用語の正確な理解も必須である。教科書や用語集などを用いてしっかりと確認しておきたい。また本年度は地形図の読図問題が本日程で出題されたが、過去には別日程での出題も多い。近年は必ずいずれかの日程で1題出題されているので、地図記号なども含めてしっかりと学習しておきたい。最後に、例年類似した問題が出題されているため過去問研究は必須である。常に地図帳と統計を傍らにおいて総合的な学習を心がけよう。